山庫全幸

史部

欽定四庫全書

史部 名蹟録目録

詳校官編修臣潘廷筠

編修臣程嘉誤覆勘 總校官庶吉士臣倉 聖

校對官學正臣常

循

朓

腾

録監生臣劉家瑛

欽定四庫全書 名蹟録 提要 諸詩之例其為明人確矣稱元人者誤也珪 之上即徐坚作初學記以唐太宗詩冠前代 列洪武二年崑山城隍神結升於元代聖書 **珪字伯盛崑山人舊本或題曰元人觀其首** 臣等謹案名蹟録六卷附録一卷明朱珪編 る山田 史部十四 目錄類二金石之屬

銀完四庫全書 善篆籀工於刻印楊維楨為作方寸鐵志鄭 者其序謂取穆天子傳為名蹟於弁茲石上 一顾阿英諸人亦多作詩歌贈之又工於摹勒 其字作銘不作名且今弇兹又稱乃記其迹 元祐李孝光張翥陸友仁謝應芳倪蹟張雨 之義然穆天子傳稱乃為銘迹於元圃之上 石刻因哀其生平所銷編為此集題曰名蹟 於弇山之石亦無名字不知所據何本也漢

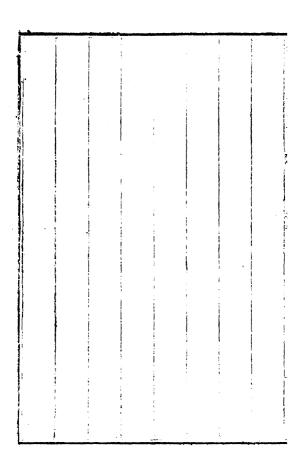
錄金石僅標題跋尾而已自洪适隸續備列 是為士大夫自鐫之始歐陽修趙明誠等輯 自魏受禪碑邯鄲淳撰文梁鵠書鍾繇刻字 代諸碑多不若撰人書人刻工尤不顯名氏 碑文是為全録刻詞之始若自刻其字而自 王之作不敢與臣庶相樣雖篇頁無多而自 輯其文為一書則古無此例自珪是編始也 首語一篇御製祭文五篇璽書七篇益尊帝 召请

銀完四庫全書 自為一卷例也次碑十四篇記二十九篇墓 自為一卷用元好問中州集冠以御製两頁 附録一卷則皆一時贈言也原目註缺者凡 墓志銘二十四篇襟刻字畫二十六種末為 表一篇墓碣五篇行狀一篇擴志二十三篇 七篇。碑八篇記十四篇碣一篇行狀一篇擴 石室銘三佳銘靈槎詩柯敬仲題桃花鳥詩 四篇今有録無書者又御製祭文五篇至書

ノー・ノー・ 陰其曰陽者無取河水在其陽之義唐司馬 汪漢書地理志據山上碑知黎陽在黎山之 晏注史記儒林傳據伏生碑知其名勝晉灼 士易府君擴志一篇在故宜人李氏擴志前 誌十四篇墓誌銘二篇祿刻六種其无故處 篇而目不載益傳寫訛脱非其舊本矣魏張 道人顔君墓誌銘後有故王子厚墓誌銘 而目録列青村場典史沈公曠誌後又金栗 召员

多分四月全書 載盧熊所作翼墓誌不知其卒於至正二十 郭翼諸書載其洪武中出為學官非得是書 以石本為據而歐陽趙洪諸家以碑證史傳 母媪當為母温宋方崧御作韓文舉正亦皆 四年未當改節仕明也足見其有資考證矣 愈於年紀綿邀搜求於磨滅之餘者如元末 外誤者尤不一而足是編所録皆珪手鐫固 貞注史記高祖本紀據班固四上事長碑知 提送

欽定四車全書				乾隆四十三年八月恭校上
电名 要錄		總	總	一年八月
,		總校官臣	總養官臣紀的臣陸錫熊臣孫士毅	茶校
		官	紀的臣	上
_ <u></u>		 i	怪錫能	į
		陸費墀	臣孫十	
		墀	教	



钦定四軍全書 ! 名蹟秣 知州王公去思碑 外次公去思碑 目録類二金石之屬 部十四

記 崑山州重修學宫記季考光 崑山州重修儒學記季 和 崑山州重修學官碑楊維 重修靈慈官碑鄭東 崑山州重修東嶽廟碑 海道都漕運萬户府達鳴喝齊托音公政續 砰 日射 楨

たこの自公与 卷二 記 豐兆院記 崑山州重修三皇廟記陳秀民 崑山州重修永懷報德禪寺記到景元 放里廟新建宗魯書聖記周伯時 瑞雲精舍記鄭東 大質洲記 名雌绿

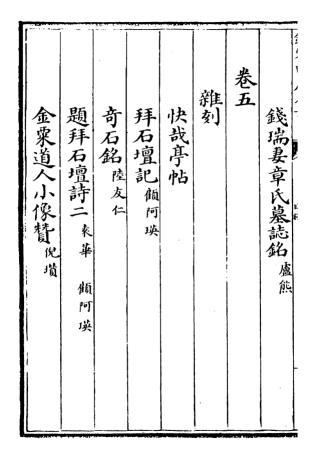
無倪舟記鄭東 脆海軒記 花雨軒記泰約 崑山州知州史侯生祠記 花雨軒記張鄉 海曙樓記鄭東 直治龍祠記鄭東 鄭東

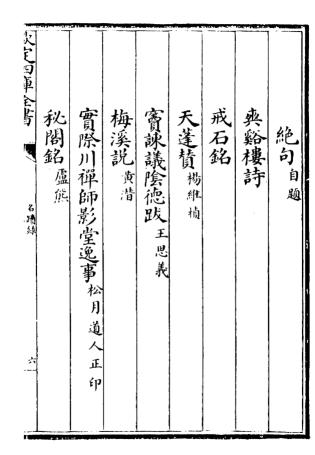
東京 東

擴志 故從任郎吉水州判官易府君擴志 故宜人李氏擴志 故處士吕府君擴志 故青村場典史沈公壙志 元故處士易府君擴志 元故雲濤處士濮陽吳君曠志 元故布古道人朱公嬪志 日注 **欠足四年在島** 卷四 墓誌銘 故王子厚墓誌銘盧熊 故徐氏孺人擴志 楊履齊先生墓誌銘鄭東 金粟道人顧君墓誌銘 元故處士陳君墓誌銘 **兀故海道干户曹君擴志** 名精练 自製

故朱徵士墓誌銘殷産 故處士夷孝先生盧君墓誌鉛申屬衡 章母墓誌銘 孫君墓誌銘 虚府君妻王夫人墓誌銘 縣奎 序曹亨銘 故處士傳君墓誌鉛段全 元故请夷先生顔君墓誌銘 元故遷善先生郭君墓誌銘 鄭東 盧熊

近定四車全書 楊子經墓誌鉛盧熊 故張公墓誌銘素華 周伯延墓誌銘 盧熊 故問那居士楊君墓誌銘殷產 周府君墓誌 故俞府君墓誌銘 故劉府君妻盧氏墓誌銘 故處士唐君墓誌銘 1名版録 虚 熊 虚熊 H 歷能



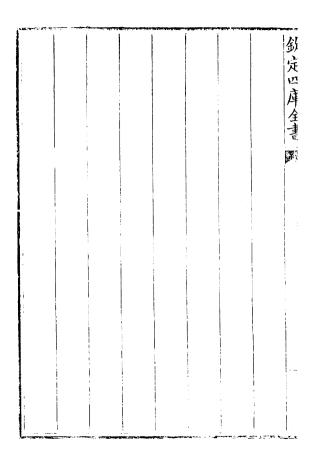


金发电力之言 卷六 附贈言 鏡名鄭東 贈朱伯盛詩序鄭東 拄杖鉛兒蹟 張雨七言絕 李孝光七言紀

決定四車全書								
Ţ,	釋智寬	釋清欲	虚能七言律	陳世昌五言長律	顧門琪七言絕四	郭翼七言律	倪璜五言律	鄭元祐七言作
名類蘇			律	五言長律	言絕四首並 践		律	古作
Ł								

印文集考序產無我伯盛南小像黄兒墳 方寸鐵志楊雅楨 跂二張神 詩和經 頌奉約 名性友仁 張昱 元鼎 謝應芳 殷奎 陸居仁 线性善

というのは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、これのでは、	倡二 順阿瑛 清	題朱伯盛所藏具孟思三體心經	字原音訓跋盧熊	字原表目跋盧能
5 章	清 欲	吳孟思三體心經 報經 清欲		能



人已日日白日 欽定四庫全書 奉天承運皇帝制曰帝王受天明命行政教於天下必 禮樂鄉有思神天理人心其致一也朕君四方雖明智 及者也神司淑恩為天降祥亦必受天之命所謂明 有生聖之瑞受命之符此天示不言之妙而人見聞所 名蹟錄卷 語命 崑山縣城隍之神浩 名蹟纺 明 朱珪 編

簡在帝心者君道之大惟典神天有其舉之承事惟謹 孟分口 崑山縣城隍聰明正直聖不可知固有超於高城深池 **弗類代天理物之道實盤於東思應天命此神所鑒而** 威靈丕著祐則福澤溥施此固神之徳而亦天之命也 司於我民鑒於邑政享兹典祀悠久無疆者主者施行 之表者世之崇於神者則然神受於天者蓋不可量也 縣色靈祇所司宜封曰鑒察司民城隍顯祐伯顯 以臨御之初與天下更始凡城隍之神皆新其命滕

とこり自己的 洪武二年正月日 崑山縣城隍神廟在縣治西南三十步甲辰歲仍故 僚属郊迎惟謹焚黄祭告以拜罷命是夏六月不雨 縣以伯冕服之章咸有其度示更始也明年春三月 **址復作之今上御歷之初歲次戊申冬十又二月韶** 公瑾請於祠下與神約盡三日雨降及期而雨 已亥蘇州府照磨張潛奉敕書到縣知縣臣公瑾洎 有司祀山川以城隍神配且錫神爵府以公州以侯 名蹟録 縣

銀好四 雪足父老咸謂神之靈響素著至是<u>益信兹擇乃吉</u> 日用刘制詞洪惟朝廷嘉惠於神馨香所格實自今 始神其相我民社以永垂於無窮哉臣公瑾拜手謹 書奉訓大夫蘇州府崑山縣知縣臣王公瑾承事即 蘇州府崑山縣丞臣董仲宣承事即蘇州府崑山縣 丞臣張顯將仕即蘇州府崑山縣主簿臣馬克成将 仕即蘇州府崑山縣主簿臣趙惟善蘇州府崑山縣 眉有重 典史臣苗利貞洪武二年八月日建

九三日草 白馬 至正四年右丞岳實珠公實奉上命恪度勿怠公方嚴 佐賓属儿若干人俾專殿職心簡拔長村通習海事者 歷代無海漕海漕自國朝始歲漕東南之栗三百餘萬 石出崑山海行走直沽而達京師事重以大置漕府長 又應其曠官弛事皇帝歲遣江浙行省重臣使紀綱馬 碑銘 資政大夫江浙等處行中書省右丞岳實珠公 政績碑 名蹟録

亮直不事表禄嗜好寡薄儉以爱人至官解見供帳庖 金人口 食告以利 能黃漕具及官與值則寫期日多簡陋就事公即先 於廟下躬視祭器牛馬充脂百禮備好性酒既陳正冠 月與值且今府長長循為故事祀事天妃擇日裔被宿 稱敢以私奉重傷民財吏士視效問有需做漕户力莫 膳甚備即今去之曰吾任國家重務朝夕祗畏慮有弗 進退與俯誠敬彈盡文武上下不詳不做神嗜飲 行萬艘畢發鼓鏡喧嚣掉工踊躍謳吟滿 數

居石量

獨不使民力傷父老歌咏於道旁永永恩德矢弗忘我 **珓告我日月良漕發之旦陰以賜海之百怪俱遁藏神** 大執事材盡長我公隸之孰不覆給供百物循故常公 舟道海行汪洋祥殿應候不可與唐官飲食勿暇遑小 之貞石用昭体續乃系之以詩曰王畿輸栗東南疆造 見蹤跡則公爱人事神之誠感召至和不証矣是宜刻 公齊潔祀孔明陳姓以肥酒芬香靈保歡喜神具餐審 相風之旗端正北向百示效職海水晏伏長鱷大鮪不

とこり巨公的

名聞舒

歸執樞均萬方海版千載遺歌章鄭東撰吳春書 里之海三日杭民惟足食人且康禮樂可作王度彰公 來真我靈人光大星实实流中橋開張風風如鳥翔萬 金火 巨屋 有書 之為治也難封建未罷上下相安故得以咎民情而通 先聖王之有天下也百官庶職悉用仁賢布列中外 淡海内無匹夫匹婦之不獲者矣然古之為治也易今 有淫惡即屏除廢置以遠人害故當是時至治之澤流 奉議大夫崑山州知州王公去思碑

大に四年在書 禦馬尚非其人之才且皆而有能過人者未見能善其 風俗是以能相安也後世分郡縣置守令一旦以楚人 則淫民無食則死學社教與食民之本也不可緩也乃 賢不肖共處吾將為善彼或沮馬彼將為不善吾莫能 而臨之越人之上民情莫能營風俗莫能通且長與佐 而事繁號為難治至治三年東平王公世傑實長是州 治者也吳之崑山其地濱東南之海土沃而民衆賦重 公鹿亮簡直惠以愛人始至重視學宮社稷曰民無教 名蹟録

大吊屋歌市過之且持酒有指拜公為壽公規起與民 為坊正管庫民且當次吏搖民壞次以取路歲凡數四 富貧使自實民不忍欺因得品次若干户釐為三等役 民不得寧多流出境公數曰民病有若是耶乃屬其民 作講堂以居講習更新壇壞以嚴犯事初民多入賈街 至不均民情困敝公即更之人無怨言法以四時役民 射利公諭力本闢田凡若干頂吏並緣為奸里正役常 以不易民喜而相慶曰我等可相保矣民因書其事於

金厂口

・ノ・・フ・ハー・ルー 為主飲民酒至一杯盡民同聲曰願公百歲民之流徙 牵連至行省州父兄子弟慮公因沮柳葉官至累數百 而來歸者相接於道崇明為州遠在海上去崑山且數 利乙手臂提甲甲以矢中乙緊獄二年公處得其情出 百里其民間之願為崑山民者凡若干餘户甲與乙争 人請省門見丞相泣且言曰我公無罪願大人神明無 同事後連捕緊獄公以督從亦悉出之公以愚民註誤 之涫船入海遇贼贼耻涫夫四人遇船以及切之使與 と清ホ

齊民民日父母止生我躬不有良收孰 御我窮告公來 億維兆不遐有傷孰協於治曰維守臣敷以仁義治於 是為可以偽為哉彼或失其道而曰民之無良是亦不 以莫不覆亦無不載如地之厚顧瞻九州九州茫茫維 明之甚者也使觀於此亦可以少魏矣銘曰皇仁如天 且情可謂能過人者矣其施諸民者厚而民報之亦至 以毫髮加我公由是感動即諭遣公還未幾公以母夫 人卒去去之日民沸泣遮道馬不能前嗚呼若公之才

剑

5月四庫

全書

・こううこう 使克燕我人恵于天子我聞公歸請公勿亟匪公則歸 召咎匪公之愆控於方伯斯悟公賢帝方思治君子是 如病頭垢卒用櫛沐民雅于辟俛俟刀斧維心淑問縱 天下之事久而趨於敢者勢也任其事而不知其敬非 作輔天室崑陽鄭東撰崑山顧信書濮陽吳唇蒙 之園土民間來歸如彼流泉連橋濟海於我受壓民愚 止重食敬教凡百有作去惡從好我役孔艱集于子毒 海道都漕運萬户府達噜噶齊托音公政績碑 名蹟詠

銀好四母在書 其亦利甚歲潛米亡愿三百萬石當是时也潛法始立 阻不可河漕陸挽也時則有朱張氏能用智應身入海 所出之米內充京師上下有司百官六軍之食道里逐 過人者不能與也告我世祖皇帝既定南服將轉其上 且二家般富不有買賣盗食輕敢慢上自二家廢迄今 水尋其漕道山崑山出大海舟西北行旬日而抵直沽 小故持已斷而不感衆見非其人甚智且勇其才有遠 智也知其做而莫之能易非勇也今夫主公義而不恤

人足口早台等 一 容諭之日今官與汝直且汝視直所漕米多寡有差他 素服公威望重令下無一人敢後至者進民廳事下從 直刚果慈惠愛人始至則張理綱紀修舉廢墜漕户彫 漕萬則官之萬也漕千則官之千也一或寫質則相率 靡者盡削其籍别召富民傑共漕事始人甚難之然人 以服人至正十二年冬托音公實奉命來居府長公魚 無賴買賣盗食無所不至矣朝廷以漕府吏其風米無 四十五年漕户率衣食於是或其家粗富而其人畏刑 名蹟鉢

役且 給漕直漕户利馬故事歲春夏军臣暨漕府長祇奉皇 從公日我為轉展顧不急且重也竟取鈔二十萬錠以 聞之馳馬至姑蘇驛從使臣留動使臣以軍務急重不 自代且為常法時府庫空置漕直錢莫知所出公愿後 時害事憂見於色會都省遣使送鈔行省供億軍務公 以新户多富户民多軟弱弗習海第無失事聽其用人 船以稱塞公命初法漕户有不肯躬身入海者坐之公 切汝復無苦也民聞公言問敢遠逆退相先治

金グロ

长

火尼四車合島 蓋良民也迫於鐵耳吾食厚禄奈何坐視民機且死不 帝命致祀海神天妃公度恭齊被躬視性酒肥充深新 之成周國有大事則六官通職以相助是謂官縣故有 衆吳民鐵公視官應多羨米謂郡長東曰今四方盜賊 為好公祭知之弟令坐漕户母縱氾濫極民民免者甚 少願恤也即長吏即盡出羨米平價大縱民程民甚您 風禁息卒以無虞漕户盜賣米而征民取償吏役並緣 一如法式比於行事進退與俯始終恪誠神相漕事壽 名蹟绿

孔將 聲令其政績又顯著若此作為銘詩刻之貞石以示無 窮不亦宜乎銘曰於皇世祖既受天命奄有南服南服 法易弊其智識實能以佐其勇是不謂之有遠過人之 金少口 才者耶公當為御史出監閱憲復貳浙東帥間皆大有 喪荒之縣事若公之故民饑非出位也且其居漕府更 乃漕其粮上入於京其食斯足凡彼作法維鮮克終 不有叔彼衆酒人乃敢用奸勿畏于戮皇帝曰喜謂 有江有湖延殖嘉穀有新附臣肇啟其海用海為 月と言 しいいり自己言 惟機中心但是食勿暇逞民來質質俾控邦侯發陳於 發之旦無暴風雨較鼉道匿水波偃平保有樯橹具民 **强役亦勿從海于大於汝致虔神妃沐浴齊慮遷宿祠** 倉民無散流老稚飽嬉歌於道旁其歌維何日維報功 億萬觀者神食馨香馨香惟誠匪樂巫舞神妃效靈漕 天子聖明亟召公歸公歸東樞大惠厚方崑陽鄭東 公汝南作朕心腹公召我人曰來共事匪汝茶毒復汝 下躬視潔肥壺濯鳥頭羊豕牛馬大昕公入裸薦拜起 名蹟録

諸侯非其境內則不得祭非惟不敢踰犯禮制然亦 魯得祭令其祠廟遍天下則天下皆得祭之非止於魯 金月四屋石書 唐虞巡行心先至其地成周之時其山在魯境內故 其氣之所能通也微之列有五岱宗在秩祀為最隆故 濮陽吳屬書 矣昔楚昭王有疾卜曰河為崇大夫請祭諸郊昭王曰 有天下者得通祭山川之 神益中天地而立故其氣通 崑山州重修東嶽廟碑 籺 惟

省左丞朱公清所建也中殿後閣前門旁庭規制完 豈以是飲宜他蘇不得與馬崑山有祠大德初河南行 能出雲為雨且其雨及天下是有功於天下天下祀之 一層寸而合不崇朝而過雨乎天下者惟泰山爾是泰山 陵能出雲為雨見性物皆日神公羊氏傳日觸石而出 為福耶錐然子當考夫後世偏祀之故曰山林川谷丘 稱其為知大道然則山川非其境內不能為禍碩獨能 三代命祀祭不踰望不穀雖不德河非所獲罪也仲尼

火足四草公与

名蹟録

堅者日腐土之黏者日解丹獲之絢爛者日晦昧漫漶 以易解者以固而晦昧漫漶者以新時至正十二年壬 相近之地兹屋日就於壞不修將何以嚴祭祀乃與其 傳金君修德殷君元善楊君春澤迨今且六十年木之 師盡出所儲即與工役邦人亦多輸錢以助未幾腐者 成也初震亨又别作室於祠廟之東南曰靈寶進 乃延道士殷君震守主之且使之甲乙以相承繼次 澤乃謀於師曰祠廟之設實為兹邦之人雨晦疾厲 核

能建祠廟使神福於一州者未公也能繼其功而勿墜 黍稌濕燥丕穰穰民不饑餓逢屢康中非靈示孰主張 歌以事神其詞曰岱宗嚴嚴位東方大哉死鎮魯所望 者殷與楊之力也是可書已又為之作為歌章使州人 其色上與天蒼蒼蒼龍七星經中央發育萬物司青陽 天厲不降降体祥大雲時出胃八荒氣闔為雨闢為賜 推重宜其傳世皆賢也余惟能福天下者必宗之神也 令亦春澤主馬震亨字在山崇明西沙人徳業為時所

反正四百合等

名脂稣

金月口 聽風條忽神來享昭明在上何洋洋晃而青紘帝衣裳 兹義明白非渺茫恭惟洪功浩莫量千古萬古天同長 數錫四海名永慶崑陽鄭東誤濮陽吳唇書并篆額 西南北中讓莫當扶桑出日灼殿堂木蘭斷僚文杏梁 唐虞下暨明聖王代隆祀望彌昭彰秩踰四岳禮非常 山祇川后序兩旁祝傳神指意孔藏天子萬歲壽無疆 姓角握弱匪强黄流在白臭馨香我上而食時日良 重修靈慈宫碑

重雖地之相遠若秦越無來車御馬之勞不踰旬日可坐 海之利天下其功用為最大通舟楫濟阻遠遷貨資之 有神之智力以相左右其能克濟哉我元運東南之米 而至矣然天下惟海為至險况夫操不可恃之器而陵 下水四無畔涯彼以助然之身談笑而往無少怖畏疑 取道遼海繚繞萬里而達京圻其亦遠且艱矣惟海神 不可測之淵其遇卒然之變有非人力可得而禦者不 天妃有功於國與民者甚大舟入大海汪洋之中上天

火 己り 車台

名蹟鍊

顯赫 金少口人 愿之心以神賴也當大風疾至海水盡立雷電交下天 祠額曰靈慈崑山周涇有靈慈宫大德間朱公清所建 元祐間有功朝廷始立祠於其地聖堆殿後靈蹟日益 其禦災捍患者此神之得祠亦宜矣神夙昔若靈至宋 神之檣火燒如大星衆叩頭再拜舉手相賀如得更生 也因肇啓漕道出入海水屢承神休所以表者靈蹟 日盡瞋同舟之人對面不辨顏色窮蹙危殆叫號於神 凡東南並海郡縣悉皆置祠祀之度至國朝始錫 巷

驚日是雖主祠失人亦有司之過也乃出公部鈔計凡 完好绝以事神明以祗待王命至正十三年春令漕府 馬皇帝歲遣使丞看實臨德意優渥曰是宜官祠修潔 得從以行且私奉上命具六牲以嚴祀事春夏凡四至 為犯禱之地當漕發之期省臣及漕府長佐必躬祠 長佐及遠近富人皆相先出錢以佐役未幾舊屋皆完 七千五百給俾新之主祠道士楊春澤用掌葺治州郡 長托音公始至祠下仰見殿無粮瓦彫獎丹至蕭瑟大

火足の事 合

名蹟録

亨卒之人以浮屠攝馬後至元間主以道士張德一公 是官之規制始備矣初祠之立實道士般震亨主之震 金少口屋 復以殿之東北為殿以安神寢殿北為樓以弭使節至 於神又復態至且圖久長及神相漕事卒底於寧雖其 且以春澤實震亨之後遂使之主是官且定為甲乙相 乃訪求道士之賢且才者將俾之舉廢修墜因得春澤 人之明馬公盡心漕政彌湍周密無有歸漏及其致力 無有變易而春澤之勤敏果能立事又足以彰公知 11111

设定四車全書 逍遥兮容與載羞有蒸人料酒兮我如孔樂无不有分 官分婁滸敞高堂兮疏户雲為車兮龍為馬妃條忽其 房女寫究兮在旁啾吹匏兮鼓簧、飲且食兮樂康築遊 與其亦可信也夫既記公事神之蹟又作迎送神之歌 來下薦廣牡兮豐黍伐大鐘兮貧鼓方洋洋兮猩舞即 兮無方夕歸來兮故鄉閱靈館兮前之陽編見户兮珠 使歲時歌以祀神其詞曰海之水兮實大以長妃旦出 昭答國家典禮之隆然亦出於敬誠感召之故神人相

崑山在宋為望縣學宮在縣治西南二百九十步元祐 高海山立大魚吼兮風吹玄旗艇先後兮火流犀橋赤 陽鄭東撰濮陽吳唇書并篆額 所東倉至正丙申海冠毀東倉州復舊治所招還流逸 問縣令杜採之所徙建也國朝以生齒之展型州徙治 民重立官寺及社稷之壇必樣神農黄帝之廟至是遂 圓斗分舟人如林命妃手兮嗟我欲留終不可久兮崑 崑山州重修學官碑

读定四車全書 校者具書幣狀顛末走百里外謁予文以志予方悼世 所致也役始至正二十年夏四月竣事於冬十二月侯 以制象設先聖先師繪從祀諸賢範祭器理大成樂又 既即僚友將更儒先生講舍菜禮先聖先師又遣職於 有教士之歸者知有養又侯之仁民禮士一出於誠之 無不如法實令費候為州三年之所成也民之居者知 舍庫庾庖温無不畢具入為堂以祀鄉先賢鑿池論堂 大修孔子廟殿之址拓其舊三之一堂室門廳齊序直 名蹟錄

此則亂世降道微邪說暴行滿天下馴致三綱淪九 侯非 校室如按堵之故非其人之守將雄才健政有以濟 與冠爭尺寸者哉記能保障其所如金湯好樣其居盧 人之所以為人國之所以為國者網常也叙此則治數 民者曷致是耶若侯者是已傳曰守令者民之師即也 變之劇州色鞠為草棘者雖鄒魯地不免矧阻江要海 節者辨討名理扶植綱常者切切然恐不及人於平 師 即之殊尤者乎抑開侯治暇即過醫官與為弟

炎定四草全等 丁 不敢斯須忘文教其不以是數告魯作泮宫國人有頌 在泮獻囚义知古之文武非两岐也侯於是用武之秋 此詩曰既作泮宫淮夷攸服是其效已又曰在泮獻誠 又告之日未有仁而遺其親義而後其君者推其效可 曰三代之學皆所以明人倫也時方崇功利薄仁義則 一制挺以權秦楚之堅甲利兵人心天理之足恃也如 人類無以别禽獸然理出於天者未嘗一息而可減 讀孟子書知先王之學校之教矣其言於戰國之君 名蹟録 +

荷侯曰噫嘻豈不在我我部百里我心一家衣冠嚴雅 我醫宇展也費侯樂師克師文事武事匪曰两岐在告 霧取其義而係之以詩云侯名復初字克明東平人賛 受成獻囚獻誠我教既成我戰必克化民服敵孰負孰 色昆在北東東薄于海桿海作邦陵谷以變井邑以遷 人民雞犬往而復還已有库序鞠為草莽治必有教復 植提按控順陳善都目沈繼祖謝安道也詩曰維呉支 其成者同知州事海陵梅英判官濟陽丁復初教授陶

ロノノニ

家額 火足り車全島 提舉楊維楨誤將仕即杭州路海寧州判官褚兵書并 維見有石維石有銘銘以著續車觀厥成有元至正廿 黄典李誉學更夏岂竹先仁奉訓大夫江西等處儒學 年歲次辛及春正月上元日建訓藻陳增殷全直學 豆静嘉天網不數國紀攸敘如子從又如弟子聽傳 記 崑山州重修學官記 名蹟舒

金りロ 一睹己子當考所謂校室之制則熟也即其所以督教之 意遂使田盧民氓皆盡躬行孝弟忠信之行其效美矣 福天下記稱國有學逐有序黨有库家有塾其大器可 帝初定天下即使使東祠孔子復延致鴻儒大與禮樂 教民者民從治民者民訟是以學校重三代之際學校 文教之事民口為儒家復其繇役每詔下條序學校於 及秦葉詩書不用學校逐發至漢孝武時始復與學山 以下每一改邑學軟隨而弛此久而後後我世祖皇 巷

改定四事全替 四 以為子弟講業問辦之地守以時入學則居於是使論 隆學校所以樹教本也乃使修學宫上者棟守下者步 一無随弗治曰不教民無以為治學廢教將安出夫國家 是聖道彰明教化純美天子坐致太平之功學校不廢 **無周垣靡不坚完又使士顧信相於論堂之北作新堂** 者弗察浸久浸她至正四年春今守王侯士英來見其 東倉今州是也既選有司作新學其制務侈於舊然來 也崑山故大縣頃以户滿若干方陞為州後徙治益東 新新

説所受於師者以察其進否又鑿兩池夾室之旁中植 清是嚴學成而予適至入其境民有員老持幼望其色 蓮花曰是周子之所爱而為說以喻道者也因名堂蓝 而不煩草來關矣予曰斯寬矣能使民選善余當論之 侯之美曰仁而不惜徭役貞矣庶而不苛盜攘息矣勤 親又多善政是能養民者也吾故還耳余聞其言而歎 日斯近於仁矣能使其民親遊於其校士之居校者稱 而歌問之而日前日為政者虚故去之日聞新守善養

见已日年合号 若綿蕞守入伏謁顧瞻林楊俄而大起棟隆且吉相作 皆盡躬修孝弟忠信如古之制其效亦無不著觀侯之 東其縣維婁地大民夥陞取雄州州既改作民來如属 民奏也余願竊取其義因為詩以勸教民詩曰勾具之 於學善矣又能以身先夫民民喻其仁若依父母誠稱 國家之明制無幾知教矣昔者魯修泮官而魯頌作重 不教則悍乃作新學學誠教首吏醫勿察彌久而弛置 夫民易治耳道之仁而仁道之讓而讓設為學校教使 名蹟錄 F

校視縣為萬下縣既陞州而學校尚仍舊規制甲狹 竟山學校之難異於他即有三故馬州之信為縣故學 金八人口人人 人言言 水浸浸盖苔其花錦紳縞帶客色西如弱哉爾士有敬 願之公所告我避逃將子車下令絃於官進豆陳祖池 躬母苦征徭恣求良朋父兄園觀數喜忭舞執公之轡 新堂使居經誦更進弟子試為禮頌守謂弟子力學自 母怠作室者誰守世傑氏李孝光誤 崑山州重修儒學記

灰足四東各對 周 官山為甚其故三也雖然事存乎政政存乎人其轉移 得人經術之不明行藝之未備不能正身檢下而且徇 隷儒籍者数不満十人蓋民非土者則所向無恆心士 地類海荒落其後日漸生聚成市酱漢閩廣雜處混居 私以縱其好是以蘇愈深而與愈甚此學校之通患而 非土者則所習無恒業其故二也又令之職教者非盡 而上者者十無二三文學之士亦率自他邦來今之舊 以脊觀瞻與士類其故一也又今州治乃舊太倉地 名蹟録 Ŧ

空於計吏之手歲所入無幾何入即隨手支付無所儲 文彬來為守既謁廟庭即惕然思有以新之先是學瞻 儲者始有餘此佳之所以立其本也乃履殿西偏地復 金月口 侵疆三畝有竒築而為牆凡四十大殿後地舊為汙 去之即浮費謹出納明號令而是歲之所入者始全所 其前為軒者一凡向時之侵漁窥凱胃占儒額者悉 亦無其所侯命先作倉度為屋者三異其左右者二 人機亦存乎為牧守者何如耳至正九年夏史焦

足已日東台島 願 殿不及二丈六尺其入深三丈門東西為官廳各四楹 河岸而為牆於其上此侯之所以廣其基也基址既固 旦暮潮汐湯激幾壞址乃募工與土實汙池疊石以防 乃建講堂堂之高二丈三尺其入深五丈以楹數之者 盤島五丈二尺深亦如之為儀門二楹如殿其萬視 輸力者聽蓋侯之德惠政教足以動之故其樂於超 其費出於州民陳允恭而凡备築完號之務則民之 如此若侯之自為與資於學原者則更建大成殿為 名蹟

業者有師執經有徒誦聲洋洋達於問里觀者易視聞 金少口匠石電 彰至是始改為塑象凡百有五人其門牆亭泮靡不完 為屋二十有六先是從祀諸賢並圖於壁翳昧移剥那 堂之東西為齊以居生徒殿之東西為無以列從祀通 貢進士祭君景行景行亦孜孜展力以相其成於是校 好始於至正十年之正月而以明年二月成此侯設施 不得已者必日一至馬若朝夕程督則授之教官前鄉 之次第也侯之綜理規畫不啻若家事非有公府劇務 K

改定四車全書 人 鄰色最其間又以大點為朝名卿抗疏力抵權貴者清 義不汙者率有其人至近代端拱迄咸淳科第相望為 者易聽而人心俗尚之變且權與於此矣已而蔡君述 多名士然猶曰才華過實君子所不取如清慎超卓仁 者不及此雖然予嘗徵郡來所載人物自晉二陸而下 横縦巍馬廓馬跨軼前代非力足以任重才足以立功 矣然因仍者易為力改創者難為功今斯學內外高深 其本末以來請為記予前佐領江浙儒學所記學校多

意正心以修其身心明乎治國平天下之務以達其用 師以是為教弟子以是為學夫如是則德成於已名揚 嘉惠士子者甚至為士子者益亦以侯之心為心以聖 集生齒之繁財殖之富皆有加於在告而人才之見於 節凛凛照映史冊為間里重州治既垂四十年商賈之 由乎禮樂射御書數之文為大學心由乎格物致知誠 賢之學為學為小學而必由乎酒婦應對進退之即必 世者猶有愧馬此其故可知矣今侯一舉而新之所以

武器將軍建昌路総管府判官胡布書并蒙額 侯之盛心云承務郎前浙江等處儒學副提舉李和誤 舜記予獨舉其作新學校之功以為州之士予勘無負 史侯之所望於諸君者哉史侯為州所增應創設不可 於後時居則善其鄉以成禮讓之風出則廣其施以著 之行事之實上以忠於國下以有光於前間人夫豈非 浙提舉季先生和為之記史侯去而碑未朔至至正 至正九年夏史侯文彬守崑山始新州校規州制也

火已日日入時

名蹟绿

一十四

遺蹟者何孔子裔孫有仕於東南者僑居於此故名其 金分口屋全書 地日孔宅徑也徑之東十五里日青龍鎮青龍又南六 宗魯書塾者松江上海之士民因孔氏之遺蹟而作也 董成之鳴乎史侯建學功非一日而數年間始得刻 夏平江路崑山州儒學教授江南蔡基志 廿二年春基分教是那始真祠而立馬太守偰侯實 石庸非政教有所關係而史侯之勤終不可泯即明年 啓聖廟新建宗魯書塾記

聖廟 世代分據阻絕思慕其鄉作家廟進祀故淫曰孔宅 廟後因追封又名曰啓聖王廟蓋孔氏父居其也或值 者非一人歷歲滋久不可必其主名也舊訪其地有孔 滔者仕兴為海鹽令三十二代孫曰嗣哲者仕隋為呉 代孫仕漢為太子少傅曰若者避地會稽十九代孫曰 郡主簿三十四代孫曰恒者為蘇州長史孔氏仕東南 十餘里曰華亭此其地之所在也按過經孔子二十二 顏淵井宰我墩徑之北有浦曰叔梁浦立有叔梁

人己の事と与

名精舒

Ĺ

金牙口屋 宣聖及從祀四賢十哲兩無列祀漁洛新安等傳道 頹青龍人也家素饒財樂善尚義睹兹廢址名存實亡 益信其為孔氏所居矣至正歲戊子前延平路教授章 定中無下有異聲寺僧掘其地得舊時冠履等物土人 所出而不总其所自也又停孔聖廟當廢為孔宅寺泰 日叔梁而井若墩皆以弟子名省實以擬夫東魯尊其 構並建兩禮殿右祀啓聖王叔梁氏及夫人顏氏左祀 乃擇廟東陈地乗地爽追而營治馬傭工市材載堂載

人に日東とき 堂肆誦有齊東日進德西日修業黉舍粗具兵難存熾 **畝歲租米為石三百五十以資釋奠含菜養士及器服** 寢不遑理後十有二年歲庚子與化馬王麟尹上海訪 主之設訓藻二人曰洪恕曰韓羽以教弟子員直學 百用之費於是走幣致前信州藍山書院山長劉鏞以 中較何居乃畀禄米以助不給弼輔割田六頃八十餘 知其故時章顧已死召其子弼輔喻之曰汝父構是而 大儒象設尊嚴規制宏邃南院門二北祠文昌講集有 · 名蹟錄 文

罷去歲癸卯秋維楊蘇宗瑞尹上海而故 尹申 因草白文以刻石馬惟禮莫大於祀治莫先於教祀以 士 丞天臺陳聚為簿壁·職黃佑胡紹忠協恭敷治振厲 亦遣功曹董工覧增築垣以補完之有順顧與何又皆 人口王黼以司出納 八散放以迪善能敬而善俗斯厚矣古者鄉師州長属 風躬優書塾熟飭惟恪愿昧於永乃命山長劉鏞具 初前規免章氏所舍田役以優其家松江停顧 漸有條序而馬代去海陵何緝為 張憲文為 逖

Ľ

大足口巨人的 日 耶郡邑大夫士先後勸戒建置一新姐豆斯陳弦誦斯 道原於性性无不善則道無不在教無不行也吾夫子 瞽宗以示不忘祀之與教其來尚矣聖人之教本於道 地父母之德家祀户享未足以報也况是地也聖裔居 生於叔世不得其位孜孜然修明經籍垂世立教使天 之嘗建家廟矣事跡有做廢而不與見者間者寧恝然 下之人知有人偷而不淪於異類千萬世如一日則天 民讀法會射考其德行道藝以糾戒其過惡祭樂祖於 名請拜

雩之間自是具多右子使人曰其一變至於魯領不 望於後人者將摩游於書塾涇浦者如問旋於闕里 弟子業於是者湖夫淵源之正而不汙流是渦識夫體 金り 用之全而不邪徑是感是則些所望於後學邑大夫所 於以化民成俗其效豈淺淺者名曰宗魯以表其跡不 亦宜乎昔子産不毀鄉校孔子仁之諸君子之與書塾 秩洋洋如在齊濟來将可謂知所務矣於以崇德報功能是以 母有以稱述之耶於乎道若大路然人病不由耳 ľ ħ

神明之德造契以代結絕之政為之未耨以厚其生為 血飲也為之庖厨巢居而穴處也為之宫室畫卦以通 省左丞周伯琦記並書篆 與至正癸卯冬中月既望資善大夫江浙等處行中書 命不有坚人出而立人極馬生人之類減久矣毛茹而 稽占鴻荒之世人文未開茧虽之民與鳥獸争一旦之)醫藥以救其死造律歷垂衣裳以開萬世之治其有 昆山州重修三皇廟記

たこりにという

名閒舒

金只以方人工工 事奠謁之初顧瞻太息退而謀諸知州費侯曰州事草 十九年州治復還舊所大尉故承制以安卿石君同知州 報本之意哉崑山三皇廟自州治遷後日就隳廢至正 若干石召匠度材以工給其役以吏董其事不數月殿 捐俸為倡醫流義士翁然和之不數日得錢若干給米 暴露國家崇奉之意安在耶舉所宜先貴侯是其議亞 創百廢宜次第舉三皇建極之始令而廟宇崩推神象 功於生民甚大廟馬而棟守撓祀馬而邊豆缺豈教民

次足四東全書 四 **磚級之移到者整以客象塑丹白之漫遇者與以新傳** 宇之顛覆者隆然起兩無星門之朽弊者異然張階峰 **饘供之用於是乎不寫矣廟成而石君去費侯曰石君** 荡租若干州籍迷失無所考石君又追究歸之學祭祀 所謂人存政舉者是也夫弛張係乎理不係乎時廢與 王霸未當不廢書而嘆也呈以道化民霸以力服人世 之善不可沒也微予文記之予讀邵子經世書至皇帝 由乎人不由乎數有為者何施而不可也學有田若干 人的訴

馬其薄功利以尊道德者耶其知報本而善教民者邪 降俗滴古道茫昧崑山之長貳修舉廢墜而以三重廟先 趙從周都日謝弘道醫學權教授王尋教授許規立 誤饒介書余詮篆額至正二十三年夏月日平江路崑 侯名復初字克明東平人石君字安卿西夏人陳秀民 詩云有斐君子終不可誼兮後之人無乎尚有考也費 州知州俊斯同知州事部肅州判丁克明提控按贖 名蹟録卷一

火色日華 上 義明聞法於斯聲動遐邇聞者樂施殿積既美乃作殿 塩質經始之善規也按舊記寺建肇於宋政和間有僧 吴城之東百里內有属州曰崑山州故治西偏有寺曰 欽定四庫全書 永懷其州之東濱海帶河墊下湫隘祇林寺基亢典明 名蹟録卷二 記 重修水懷報德禪寺記 名蹟绿 明 朱珪 編

宇行人道川率邑人沈饒縣為募四方之尊信象教者 金り口月 郡以岳雲望禪師領之既至慨然曰吾為釋氏徒居釋 廢她為住持者莫有為起廢之圖而其衆往往散之四 夷凡規制之所存者惟大雄氏殿巍然丹望漫漶將至 朝因敕改賜額為永懷報德禪寺越二百餘載日就靡 承以法堂真以兩無表以諸天之陽而寺之規制粗備 方建呈元癸酉改元之歲浙西江東道廣教府移檄本 至南渡建炭恭政王公欲以此寺為奉先之所遂請於

炎足四年全書 雪 固 祠 贖之則質負者歸虚罄者實然後度資計庸充工鳩材 久不能復倉原虚罄而廢加甚師乃力自奮厲风與夜 寒鉢積寸界毫髮客不以私口體奉由是稽質貸之歲 氏宫起廢之責頗不在我而誰飲先是寺之土田質貨 涵寺之周園院好城牆 内暨法堂文室與夫選佛之場儲資之庫下及庖温 何以福報因果之說開諸人未能率化則出所積 自三門兩無度經之藏撞鐘之樓圓通之殿水府之 一嶽而新之閣之初建井植

宏博天地所不能容聖智所不能窮其為道勇猛精進 夫天下之事物無巨細惟誠可致仰慕佛氏之道微妙 今日見水懷之重新也遂合辭走武林屬余文以記之 雲水見名山大利之常北未當不內領而與願念不圖 落成於乙酉之夏於是棟宇隆厚上下完固輪與舊級 四福令則耦四楹而廣植馬閣之左右後創二樓 之美燦然不失信規四散之衆復集相與喜曰我等悉 弼之則軍監故豁金碧蟬垣而已似工於乙安之秋 相

灰足四草合号 哈布哈書 哉故樂然敷其梗縣而為之記載諸石以壽其傳無為 至正七年七月既望鄞劉景元記大中大夫秘書卿台 項氏世為儒官得法於實寧古林之嫡嗣岳雲其號云 之遷而徒已馬今永懷之重與庸詎非望師一念之誠 者豈不知廢之不與為己病此乃誠不属故坐視歲月 來者鑒母原原緒馬可忽諸師請道望台之臨海人姓 心所趨者不退轉卒以成佛况寺之與乎且告之尸此 名蹟鉄

後止故常去父母親戚斷割情戀不使外物騷亂其心 金グロ 吾聞佛氏之於其道也必深造超詣盡得其師之說而 豐兆院記 卷二

腸二三其思慮則庶乎其有得矣然居不可以無官室 之道有終不得而廢矣故必有上棟下守之制以却風 也機不可以無放栗也寒不可以無布帛也相生相養

火足四車全皆 周 獨處也故又慎擇其人之慈良信愿號為師弟子結之 道行彌獨得其師傳乃別築室於寺之東姚苓里名曰 以久子親戚之恩使可以相係相賴心如是無幾其可 屋為颶風所摺乃以田易廣孝寺東偏隙地而選馬傳 報恩精舍皇元至元間有司籍僧因陞為院至大德中 明天台氏之說其行業尤著法師度弟子二人曰道彌 行紫顯名當世者有日傳法師者嘗出主杭之横山寺 也崑山東廣教寺為吳雄利僧徒常二百人往往有以 石腈绿

矣 功居多非惟能紹先紫而已又愿其徒或忘前人創立 又當問學材餘足以立事常居廣孝者信與樂監察其 至允穹正因又能增益其業視昔有加矣因公性機警 戚其可以易道哉若然則庶乎始終相保相頼而無愿 由天倫之和而取賊敗者背是也况乎結至疏將為至 報徵予記之令人有父子昆弟之屬家之所以成者

次足四車全書 图 蒙泉禪師則其人也師自臨此歸於佛長遊四方從鴻 師先生盡得其說至詩書百家言亦無不通元統間教 其窮也亦可悲已故惟遊乎方外者其志堅定凡天下 将持之以欺世而盗名其自视為有餘倉墨而不止及 知之士行高當世不危其身不損其名百世之下有喜 之可尊可貴可驚可喜不入於心故常超然而自遂馬 稱而樂誦之者豈有他道哉世之末能下投壽張巧變 静專者道之基底退者福之原節儉者事之本古之皆 名蹟録

成象佛於中且以待四方賢者之來也署之曰大寶洲 越尊姓衣冠上流至於賈工下俚之人嚮戀彌至凡所 難致者謂之質珠玉吾知其為貴土山瓦礫吾知其為 **楹邑人章景仁讀書好義與師相善又能以力相之屋** 巖穴者無以過之乃視其所贏即寺之陰別為屋若干 府選材僧而得住崑山報本寺未幾遂棄不居由是檀 施與無所怯惜師勇於進修而服食寡薄雖古之枯槁 乃謂東曰子儒氏而通於詞願有以記之夫物布有而

馬能入其中者行止坐計常不離實並終有不獲者耶 脱小子之智奴隷之明也天地之間有至 獨馬智者得 生公共而均有馬居之而弗施者謂之徒實失之而不 慈儉不敢為天下先老氏之實也曰佛與法佛氏之質 生非無佛非獨有衆生非欠佛非有餘故佛常欲與衆 也合佛與法而一之者僧也故僧亦實也夫是質也求 之愚者失之矣是故實得其實者祥實失其質者殃曰 求者謂之棄實吁佛亦悲之矣今夫是洲之大衆實聚

次定四車全書 四

名蹟録

家詢 崑山東陸瑶里曰瑞雲精舍者宋咸淳間尚經廣孝寺 皆生大歡喜悉能滿其心見賜鄭米造濮陽吳唇書并 寶充滿於大洲無有非實所若有諸善人因以求寶至 室中人辨五種色疑惑不能知惟無障礙故而能見斯 諸珍等其實悉見前罕有能見者如盲眼無視如坐暗 而為領口其洲大無量中有衆實聚非金銀琉璃珠玉 瑞雲精舍記 恭二 更足四年台号 月 易公始度弟子二人其一曰法明為明之後者曰可才 廣孝眠易公之徒猶宗子也其先師弟子之傳以次至 寺殿至宋太平與國中有高僧子瓊道清者從汲梁來 之作以近族也按廣孝寺碑寺始建於唐成通中唐末 乃出分而至瑞雲馬凡彼此衣鉢之倘土田之入由是 乃重作寺以居四方之來從者盖易公之初祖也故今 至海上樂具地古且得石幢草礫中識其為故寺址也 易公所作也里有陸氏為里中著姓易公陸出也精舍 名蹟餘

金少口人人 其子孫則已寒餓而亡滅者矣令佛真相傳或悲三四 復作之視昔有加馬既又作室寺之東序之北欲後人 始判然而為二矣宋末精舍災皇元大德間明才二公 愿其世逐而法壞且忘前人之勤也是不可以無記謁 如以德鄰智融岩谷義深善權其傳皆以次文山孟公 知其所自出也由才而下曰分祥清潤净元布孟從邑 百年而不墜者無他道也世人急富貴捐禮義故子孫 文於予嗟夫世之享富貴有不能終其身或僅 一再傳

次定四車全替 四 之力五人之力十矣令海上之舟絜其大則踰千弓計 常多愚而易敗佛氏往往能慎後而擇質宜其能久也 客有夸其言於衆曰負一鍾之栗則用耽之力一半馬 是不謂之能擇質耶今又以賢而擇質則其徒宜益有 布賢篆額 **賢者矣其将相維於無窮哉昆陽鄭永造并書弘農楊** ,觀諸瑞雲若孟公鄰公皆出世而師表於天台氏矣 無倪舟記 .名 随绿

以居之力以持之是故愈义也而不憂其壞愈多也而 走鱗介之潜伏也蠢馬而昆蟲也植馬而草與木也廓 然笑之曰陋哉子之見也吾語子以大舟乎仰而制 里而不謂之勞人駝牛馬強日及百里弱半之汗出而 力盡矣然則其為器大為功多莫若舟也客有在旁咥 其力之任則踰千鍾用之入鉅海走汪洋一日趋幾千 河海之流峙也九州生聚之耕作飲食也羽之飛毛之 而制方崐倫映扎莫極端倪日月星辰之行也山戲 卷二 圆

火足四車全等 湯 從其流而知其方來然則其為器也孰與其大為功也 蠢植且百世之上吾溯其流而知其已往百世之下吾 其耕作飲食羽毛鱗介昆蟲草木使不失其飛走潜伏 不憂其隘其為器也孰與其大其為功也孰與其多客 乎其制也方寸及其廣也包乎太虛無有端倪彼仰而 又有在旁啞然而笑日子之言幾矣吾復語子以大舟 不失其行山嶽河海使不失其流峙九州生聚使不失 圓俯而制方納之吾舟之內有餘容矣日月星及使 .名

君下而公卿大夫至於族人莫不愛護而尊信其說 佛氏以慈悲弘願汲汲拯救羣物為務而不私恤其身 地之為舟吾知天地之為舟而不知大於天地之為舟幸 孰與其多二客憮然久之曰吾知舟之為舟而不知天 金罗里 其設心竭愿亦仁且厚矣自其法入中國上而萬來之 **聞先生之言可以去吾敬矣句吳白雲師署其居室曰** 無倪舟尾陽鄭東為述三客者之辨作無倪升記 人と言 崑山州知州史侯生祠記 卷二

次定四車全書 人 成通間其僧員之盛比按而連業同堂而合食者常二 能垂之千百年而勿墜也崑山茜涇廣孝寺建始於唐 不可復支况僧素不習事孱弱畏怯而一旦加之重務 南州縣之最雖多田鉅資之家一或失計即糜爛破壞 少裕馬至正七年朝廷以凡天下寺其買田非宋金時 歲不豐食原軟告置境上富人因捐田入寺日餉得以 者令徭役與郡民等且崑山為州徭役甚重以緊為東 百餘人益具郡之東名藍古利也寺舊有田若干弘遇 .名 蹟

威任刑常近民而求其所惡欲関関馬若慈母得亦子 是寺力日就澌盡如病廳人僅僅骨立時廣孝之衆相 年春朱方史公元來守崑公庶正敏亮恕惠爱人不立 **顧無策壯者將散之四方老者立侍於斃而已至正九** 官用脱刑責且小吏賤卒假威上人日持牒踵門足跡 必待之如尊實貴客雖一日數十人不敢忤一人馬由 相接苟弗滿意欲即造語生事巧發上怒動軟禍人 有司又低品失平終粟之賦刻期逼迫故往往鬻田送 至

自りに

卷二

钦定四車全書 ! 若親公顏面而敬且愛馬則亦展幾可盡吾心乎乃相 公於無窮哉古之善為治者能勿哪夫人之情則其政 東序治室而慎祠馬寺之主僧乗謂東曰凡人之情於 肯象以祠公不惟使近佛而求界以盛大之福且朝夕 矣然公之思我若是其厚吾無以報公是心缺然矣宜 之甚至寺僧乃喜而相慶曰吾可免於散亡立斃之受 事人則怠怠則忘之矣願為文刻之貞石將使吾徒懷 於其懷也乃知僧之病役而廣孝獨甚馬側然而受進 名蹟録

德恩之数也前乎公為崑山不知其幾人矣未間有能 之石甚詳也兹故界馬昆陽鄭東造并書弘農楊布賢 者又能以公之德人者德之其有不以祠公者祠之乎 祠之者由今觀之刑德之應亦大相遠矣然則後乎公 公有惠爱於人甚至崑山之民擴振其治跡之實而載 無不獲者矣故上者常任德下者常任刑刑怨之淵也 直治龍祠記

沈某海行而至直沽數數馬其出入海水船安楫牢 龍之有祀也固宜又日山林川谷能出雲為風雨見怪 之人涉危蹈險莫不賴龍以為命者且國家成清東南 物皆曰神龍實有馬則其有祠也又宜吳之崑山商者 則龍之於民亦有功哉記謂能禦大盜桿大思則祀之 通州南五百里其地曰直沾有龍祠龍能若靈凡水行 雨風和平萬艘連連卒以無事亦莫不賴龍以為安者 之米三百萬石由海抵直沽而達京師於時海波晏伏

飲定四車全書

.名蹟舒

他人而責報於人者非也蒙人他而忘報人者亦非 哉乃度祠屋信削歸擇材為屋凡若干楹既具越明年 設露處過者狎馬其心勿寧且曰神之德我人甚厚當 今神不責報而人不忘報亦各盡其道而已且禁亦尚 曾有倉平怖門之變故其事神益度因视祠宇撓壞像 春舟載而植馬質至正五年也若某可謂能報神矣夫 報德不敢背負及其既寧而遽忘之我等小人真少恩 其身危勢感叶號於神求哀而乞須史之命將終身思

火足四年全等 四 深澤之利民居縣絡比密如縣邑然吾友楊鍊師居之 崑山之東北海上其地曰茜溪土壤行平廣表有美田 難則計較得喪不肯相顧者皆是也平居則曰彼商也 子將不倍其師世之稱君子紫人厚德其人一旦在患 神者讀予文內愧而汗下也見陽鄭東造 令其見義反弗及之矣予故書之非惟使過客常負於 耳推是心而為臣將不後其君為予將不遺其親為弟 海曙樓記 名蹟鉄

金厂 當秋清暑退海月夕出馮軒而望思故人如余者散 江之水則百里外不能一 **予嘗往來鍊師必久之而後去然獨恨其無高山大陵** 有 依然不樂欲去求車益諸山以望句吳之墟太湖 山水之 如飲師者與之相從其間而不可得則又有不樂者 且聞鍊師治樓甚雄峻弘麗如仙者之居予憶鍊師 Ľ 将觀以宣暢湮鬱之氣雖日坐屋下安飲且食 一樂然寂寞無人則思其冠服修好姿骨奇岸 老二 日而往還也自予歸永嘉日 使

次定四車全書 先得之者即吾將從銀師於是樓之上又聞方外之士 曙錄師日子試為吾記之夫海之曙吾當習見馬夜過 清明之氣而吾之在躬者益有驗馬况其居萬臨虛而 半日將出扶桑之旁陰魚消飲陽光四達於是時起觀 服朝霞而能久視心有以私授我矣録師名布賢字故 二月予來吳即過鍊師求樓登馬而我二人相顧 向所謂數者之不樂皆釋然矣仰觀其相間之勝曰海 四方與之嘯咏其上而不可得亦將有不樂也今年春 名蹟舒 中日

聲生馬然其聲也始而怒中而平及終匯而為海也約 仁善為歌章好鼓琴當世賢者樂與之遊云今年實至 水之為物也側出而上溢勇決而峻下紙屋而阻石而 正十一年月日昆陽鄭東造并書 么麽之人有一善馬而其色也於有一能馬而其言也 水而有聲水不足於水也豈惟水哉至於人亦然今夫 乎至鉅齒乎至深雖欲求其聲不可得矣是知水無聲 脆海軒記

欠足の事合島 求合於吾儒氏之旨君婁江去海且近因名其軒曰聽 莫能盡窺馬是故善觀水者必於海善觀人者必於里 海或人以問予日海無聲奚用於聴于曰甚矣子之固 人得其術矣句吳俞復初為老予之言且博通雄典以 無聲則海之為海也至足矣猶求聖人於無迹也求聖 也夫臨海者非以聲求海也將求海於無聲也求海於 仁義之懿道德之豐藝能之通且冒方退然而居天下 夸夫是二者生於不足也尋丈之緣尺寸之湍也聖人 名蹟舒 十五二

聲塞天地将不能容大下之聲未有大於海也及其卒 馬大風應之與之相遇混游之中當是時子起而聽之 然而平很然而止茫然而莫知其所涯是知無聲者為 將洩其聲卒然而生閥然而合茫然而莫知其所來 頃 之量而淺海也雖然吾當居海而觀海之變當陰氣之 與海準也且天下之耳同乎聽有精粗馬大習於海而 至足之藏有聲者為至足之發吁至哉海也故惟里 人於無迹則聖人之為聖人至矣以聲而求海將以己 更足四年全書 图 婁山 日王奉奉之南隐君子居馬竹樹家翳町畦交午 莫之答者衆人也其聽粗也其智弗及也吁海哉海哉 中為軒兩極北塞而南通春冬清燠秋夏凉肅遙體悦 典次第龕閱旦日起沃盤琅然誦讀雖甚剧勿問以為 性居處宜矣君之謝事子姓長日坐軒與楞嚴法華 天下之善用其聽者日寡矣復初喜且請曰願有以 花雨軒記 名頭針

若之有得也必秋秋火神神必顯其講說處天能雨花 常如是己十載餘鄉人稱之日善士邑大夫禮之曰信 人子於釋氏非能知知君好之以獲休譽於鄉大夫士 於若有年教其子孫知孝悌忠信皆循循雅的長子復 士士君子敬之曰貞士非善無以懲惡非信無以動 之言當介愿先生求予文發君隱德予聞釋氏書善誘 初克承君志所交多名士寓公甫弱冠先生長者樂與 非自無以處已君信其鄉先生哉予友盧先生志道友

欽定四軍全書 题 感君至哉始名曰花雨歲庚成二月廿五日春郡張紳 記 坐中君講說是軒能然否即他日造軒中必有能然者 世有慕空寂以樂天賦之善而不越乎網常倫理君子 乎刻畫淡馬泊馬內養外持雖藤葛紛沓萬變日至吾 固當進之而不可概以将方之外者並論也能山王祐)前避世藏密朝夕緒誦內典以示無事乎奔越無效 名 職録 十七

藏用豈特泥夫一室而已矣花之不根不低不凋不謝 花雨且為文以表揚之而又介陸公載請予發其未發 則凝馬寂馬而已雲門山人張公士行過其軒居署日 無分乎春冬無間乎紅白又豈假乎造化滋培之力也 之旨予聞金仙之教其高深玄遠不可窺測故雖天地 日月皆有成毁而其妙有實理則固未當毀也若其天 雨質花彌滿周匝於三千大千恒河沙數世界以顯神 祐之尚能有見則雖處幻境而不為幻境所感不徒

緒誦而已乎金仙之道貴在直起無始洞悟本真所謂 玄言既超出弗泥逐弗迷熊坐動豪髮當作如是觀洪 陀香匪但闍崛城福復恒河界若人能了悟眼目鼻脚 眩衆目花為類生成凌亂從天雨無根亦無抵香娘芬 不與生俱存不與死俱己者在是而不在彼花雨强名 問觸類級有得重啓光明藏結習悉掃除雅堕不若體 子嘉其請遂因其命之意仍為偈云其花非凡花漫空 不過神幻恍惚以驚駭耳目豈可塊坐執著而流觀哉

設定四車全書

*

名蹟録

造 武四年 名蹟録卷二 一龍集辛亥夏五月端陽日樵海老人淮海秦約 老二